

Title	<書評>Karen Michelle Barad, "Meeting The Universe Halfway : Quantum Physics and The Entanglement of Matter and Meaning"
Author(s)	小川, 歩人
Citation	共生学ジャーナル. 2017, 1, p. 91-97
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67024
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

書評

Karen Michelle Barad

Meeting The Universe Halfway : Quantum Physics and The Entanglement of Matter and Meaning

Duke University Press, 2007, 544 頁

小川 歩人*

Ayuto OGAWA

1. はじめに

本書は科学論、フェミニズム理論研究者であるカレン・バラード (1956-) の主著であり、科学論、アクターネットワークセオリー (以下、ANT と表記)、理論物理学、フェミニズム、クィアセオリー、ポスト構造主義思想を横断し、独自の存在論、認識論、倫理的立場を構築しようとする試みである。

バラードは、カリフォルニア大学サンタクルーズ校のフェミニズム、哲学および History of Consciousness⁽¹⁾ の教授であるが、量子力学の Ph.D を取得している。物理学を自身の理論的背景にもつ彼女は、英米圏の学際的雰囲気なかで、精力的に科学論と大陸哲学を架橋する活動を続けている。本書『宇宙の途上で出会う-量子力学と、物質と意味のもつれ』も、理論物理学者ニールス・ボーア (1885-1962) の量子論に触発される形で執筆されている。

本書は三部構成の大著であり、序論としての第1部 (「諸々のもつれた始まり」)、本書の理論的中心となる第2部 (「イントラ-アクションの問題」)、理論部の更なる掘り下げ及び応用的論考を連ねる第3部 (「諸々のもつれと再形象化/配置」と三つの補遺 (アメリカの作家アリス・フルトンの詩とボーアの相補性、理論物理学者ヴェルナー・カール・ハイゼンベルク (1901-1976) の不確定性についての補論) からなっている。

本書の内容は多岐に及ぶため、その全てを取り扱うことはできない。そのため、本論では絡み合う文脈を解きほぐしつつ、バラードの「表象主義

* 大阪大学大学院人間科学研究科共生学系 (ayutoogawa@gmail.com)

representationalism」批判という問題設定から、本書のエッセンスを浮かび上がらせることを目的としたい。

表象主義とは何か。バラードによれば、諸々の表象と、表象される諸対象との区分を前提とする態度である。ここでの眼目は、表象主義が対象と表象を分離することで、「実践 practice」から独立した「個体／個人 individuals」から形成される世界観をもつということである（Barad 2008:46）。表象主義的態度は、バラードによれば、科学知識論、社会政治理論において広く見られるものである。

本書の表象主義批判の枠組みは、英米圏における二つの方向性から理解する必要がある。それは一方で科学論における实在論的潮流であり、他方でポスト構造主義思想の過度なテキスト主義的、社会構成主義的読解に対する反発としての唯物論的方向である。

本書で注目すべき点の一つは、バラードが表象主義批判という論点において、この二つの異なる伝統に対して批判的読解をおこないつつ、それらを合流させていることだろう。そして、ボーアの量子論解釈に、ジュディス・バトラー（1956-）、ミシェル・フーコー（1926-1984）のようなポスト構造主義的理論装置を組み合わせることによって、独自の倫理-存在-認識論である「エージェンシャルリアリズム（以下、AR と表記）」を提示しようとするのである。以下では、まず科学論とポスト構造主義の流れを確認しつつ、AR の議論を概観しよう。

2. 科学的実践論、パフォーマティヴィティ、権力装置

70年代後半、「実験室研究」の分野で主張された「科学的事実は発見されるというよりもむしろ社会的に構成される」という社会構築主義テーゼは、事実それ自体が、解釈によっていかようにでも変化するという極端な相対主義的社会構成主義、科学の客観性、合理性を否定する懐疑主義的言説を生んだ⁽²⁾。しかし、人類学者ブルーノ・ラトゥール（1947-）と社会学者スティーヴ・ウールガー（1950-）の『実験室生活』（1979）に代表される「実験室研究」は過剰な社会構成主義的テーゼに対して、そもそも実験行為の実践性を強調し、物質性とパフォーマティヴィティでもって实在論を

擁護する方向性をもっていた。この点を再考しつつ、懐疑主義的言説に対抗しようとしたのが科学的実践論の流れである。本書においても、「物質性」と「パフォーマンスィヴィティ」とは極めて重要な意義をもっており、その議論を引き継いでいることは間違いない。「実験することと理論化することとは、諸々のオブジェクトと主体、そして物質と意味の産出において構成的な役割を果たす力動的な諸実践なのである」(Barad 2007: 56)。

しかし、実験における物質的、パフォーマンスィヴな実践を視野に入れることで表象主義を避けようとするものの、科学的実践論では、あくまで「人間の」行為という「志向的」かつ「主観性」を帯びたアクターが強調される傾向にある。ここには科学研究に特有な、人間というアクターの特権視があるのだ。これに対して、ANT は人間と非人間の双方を平等にとりあつかう脱人間主義的主張によって、人間主義を免れているようにみえる。しかし脱人間主義を標榜する ANT の代表的論者であるラトゥールにしても、『自然の諸政治 (原題 *Politics of Nature*)』(2004) で記述するように、社会理論への適用の際にはしばしば「ものを代表する科学」と、「人間の関心を代表する政治」のような「もの」と「ひと」との分断、表象主義的概念装置がみられる。これについて、バラードは結局のところラトゥールが社会理論、権力関係の水準での自然と社会、ものとひとの絡み合いを分析できていないという診断を下している (Barad 2007: 58-59)。

科学的実践論者たちの議論はポスト人間主義的存在-認識論を構築しようとするバラードにとって不十分なものである。ここにバラードはフーコーの権力装置論、バトラーのパフォーマンスィヴィティ論といった批判的理論枠組みを接木し、更にそのポスト人間主義的態度を徹底化することにより、それらの乗り越えを図るのである。

ただし、この乗り越えは一方的なものではなく相互的なものでもある。バラードはフーコーとバトラーを身体-物質の主題化の不十分さと、分析の非人間的な対象への制限のために批判する⁽³⁾。バラードによれば、フーコー、バトラーの物質性の概念は「人間の」身体と「社会的」要因に狙いを制限されており、彼女自身の物質性と言説性との不可分の関係を理解しようとする試みに反してしまっているのである (Barad 2007: 34)。バラードはこのような言説中心主義的態度あるいは物質性、身体性を扱う際の過度な慎重さを乗り越えるべく、科学的実践論およびボーアの量子論的枠組みの議論

とポスト構造主義思想の接合を図る。そして自身の物質的-言説的諸実践を基盤とした AR 的立場を確立させようとするのである。

3. ボーアの量子論からエージェンシャルリアリズムへ

次いで、本書の大きな特徴は、上述のような表象主義批判を理論物理学者ニールス・ボーアの量子論による古典力学批判と同期させながら独自に存在-認識論の肉付けをおこなっている点であろう。ここで重要なのは量子力学における「測定」の位置である。バラードによれば、ボーアは古典力学が測定の透明性を支持する際に、下記の二つの根本的な想定をおこなっていると指摘している。

(1) 世界は、境界と特性の決まった個体的オブジェクトから成立しており、実験的実践の個別性から独立した抽象的かつ普遍的諸概念によって表象されることができる (Barad 2007: 107)。

(2) 測定は、連続的かつ確定可能な相互作用と関係し、そこで得られる諸特性は、観察のエージェンシーから分離した、測定以前にオブジェクトがもつ諸特性と関連づけられる (Barad 2007: 107)。

バラードは「表象主義」、「個体／個人主義の形而上学」、「知るものと呼ばれるものとの本性的分離可能性」を含み込んだ上述の想定を批判する (Barad 2007: 107)。古典力学は、測定から独立した対象を想定することによって、測定という実践を古典力学はないものとしてしまうのだ。

これに対して、微視的領域をあつかう量子力学は測定という契機の影響を無視できない。そのため、ボーアは測定における観察主体と観察対象、観測装置との根源的なもつれ、それらの「分離不可能性」を重視する。ボーアは彼が考察の対象とするものを「諸現象 phenomena」と呼ぶが、ここで「現象」は現象学的な意味ではない。そうではなく、ここで現象とは「全体性の個別的諸審級」(Barad 2007: 119)、つまり観測対象、観測者、観測装置全体の関係を意味するものである。バラードは、ボーアが目する観測対象、観測装置、観測者が絡み合う測定についての分析を「原-行為遂行的 proto-performative」と呼び (Barad 2007: 129)、実践と知の相互的連関をあつかう理論的基盤としている。ここには科学的実践論、バトラーのパフォー

マティヴィティ論、フーコーの権力装置論といった異なる文脈がバラード独自の仕方で連結されていることがわかる。

ボーア解釈の多くはボーアの理論的態度を反実在論として解釈しているが、それは上述のような測定に関わる「認識論的」議論によるものだ。しかし、バラードは上述の議論から、ボーアの「わたしたちはわたしたちが理解しようとする自然の部分である」という主張 (Barad 2007: 67) を強く読み込みながら、彼をある種の「実在論者」(Barad 2007: 122) と解釈しつつ、「関係論的存在論」(Barad 2007: 352) へと拡張しようとする⁽⁴⁾。

この際、導入されるのが「イントラ-アクション intra-action」という造語である。バラードは「相互作用 interaction」という語を、相互作用に先立つ分離された個体的要素を前提とするものとして退ける。これに対してイントラ-アクションは相互作用と異なり、先立つ個体的エージェンシーをもち、むしろそこから諸々のエージェンシーが現出するような「もつれあうエージェンシーたちの相互的構成」の存在論的次元である (Barad 2007: 33)。

バラードの AR は、このような「多重的な物質的-言説的諸実践や身体的生産の諸装置のエージェント的イントラ-アクション」(Barad 2007: 140) において、「世界の動的かつトポロジカルな再構成／もつれ／関係性、(再)分節」(Barad 2007: 141)、そして、われわれがそのなかで果たすべき「応答責任 responsibility」⁽⁵⁾を思考しようとする試みなのである (Barad 2007: 396)。

4. 終わりに-「新しい唯物論」における来るべき実践に向けて

本書で展開されるバラードの AR は近年の「新しい唯物論 New Materialism」と呼ばれる潮流においても注目されている。「新しい唯物論」は 1990 年代後半に哲学者マニュエル・デランダ (1952-) と哲学者／フェミニスト理論家ロッシ・ブライドッティ (1954-) によってつくられた語であるが、そこで問題となっているのは、心身二元論、文化／自然の二分法、超越論的哲学、人間主義的哲学の伝統に対する疑義である。これまで概観してきたようにバラードの立場もそのような流れに確かに共鳴するものであろう。

ただし、フランス現代思想受容という観点から考えた時、この潮流内にも違いは見られる。一方で「新しい唯物論」という語をつくったデランダ

や、近年注目される「思弁的实在論」の旗手カンタン・メイヤー（1967-）は实在論的、科学論的傾向の強いドゥルーズ的な方向性から唯物論、实在論にコミットしようとしている。他方、バラードは科学論の流れを汲むANTと、英米圏においてフーコー、デリダのようにテキスト主義的と解釈されきったフランス現代思想の枠組みを組み合わせつつ、ポスト人間主義的フェミニズム理論を展開させようとしており、異なるポジションをとっているようにみえるのだ⁽⁶⁾。現代思想の古典化とともに再読が進む中、どのような再理論形成がおこなわれつつあるのかを一流行として消費せず、見極めていく必要があるのではないか。

学際的な研究が進むにつれ、人文社会科学においてもいわゆる「自然科学」がとりあつかう「实在」を語ろうとする潮流が現れてきている⁽⁷⁾。そのような流れのなかで、本書の枠組みは既存の科学哲学、社会理論の横断的改鑄の試みとして評価することができるのではないか。誰／何と、可能な限り拡張されたエージェンシーたちがいかに共生するのか。本書は、われわれの共生の可能性の領野を押し広げる実験的実践の企図であるだろう。

注

- (1) *History of Consciousness* は、カリフォルニア大学サンタクルーズ校に設置されている「人種とエスニシティ；ジェンダーとセクシュアリティ」、「哲学とセオリー」、「政治経済と社会運動」、「メディア、美学、詩学」の四領域からなる学際的学科である。
- (2) 以下の科学論における科学的実践論の展開については平川（2002）を参照。
- (3) ただし、フーコー、バトラーの関心はあくまで人間の経験の境界を分析することであり、そもそも本書で展開される物理学を基盤とする非人間的存在論の構築にはないように思われる。バトラーのマテリアリズムおよびフーコー解釈については藤高（2015）を参照。
- (4) この論点は第7章における現代の量子力学理論、検証実験の検討において、より詳細に展開されるが本論では紙幅の都合上取り扱うことができない。
- (5) ここで参照されているのは、E.レヴィナス（1906-1995）の他者への「責任＝応答可能性」概念であり、後期の『存在の彼方』からの引用がなされている。レヴィナスをポスト人間主義的倫理あるいは関係論的存在論へ接続することそれ自体が議論に値する。
- (6) このような潮流として本書でも参照されてもいるダナ・ハラウェイ（1944-）、エリザベス・グロス（1952-）といった理論家があげられるだろう。
- (7) 例えば、本書でも参照されており、大きな影響を与えていると思われる人類学者アナマリ・モルは科学的存在を語ることを忌避する社会科学を批判しながら

ら、医療実践における複雑な言説的-物質的配置を分析することで独自の实在論的立場を提示しようとしている (Mol 2002)。

参考文献

- 平川秀幸 2002 「実験室の人類学—実践としての科学と懐疑主義批判」 金森修・中島秀人編『科学論の現在』 pp.23-62、東京：勁草書房。
- Dolphin, Rick and Iris van der Tuin (eds.) 2012. *New Materialism: Interview & Cartographies*. Ann Arbor: University of Michigan Library.
- Hacking, Ian. 1983. *Representing and Intervening: Introductory Topics in the Philosophy of Natural Science*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Latour, Bruno. 2004. *Politics of Nature: How to Bring the Sciences into Democracy*. Trans. Catherine Porter. Cambridge: Harvard University Press.
- Mol, Annemarie. 2002. *The Body Multiple: Ontology in Medical Practice*. Durham and London: Duke University Press.